

「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現する 授業の研究

——古典と漫画それぞれの作者の意図に着目して読む授業の場合——

早野賢謙

1 はじめに

平成三十年度七月に告示された「高等学校学習指導要領解説 総則」には、平成二十八年十二月の中央教育審議会答申をもとに、次のように「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が定義されている。

- ① 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める

「対話的な学び」が実現できているかという視点。

- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

古典の授業に還元するとするならば、次のように解釈できる。① に関しては、「学習者個人が古典とのつながりを主体的に見いだしていくこと」。② に関しては、「学習者が古典をもとにした対話を通じて、時代や周りのつながりの垣根を超えてつながっていくこと」。③ に関しては、「学習者が古典を深く探求していくこと」。以上の三つに考えられる。

これら三つの観点を意識した授業とは、どのような授業なのか。平成三十年度改訂の「高等学校学習指導要領解説 国語編」の引用部のつづきには、「我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点を学習指導要領に明確な形で規定したものである。」とある。傍線部に着目して分かることは、これまで積み上げられてきた授業実践の中に、三つの観点を含んだ授業の視座を見いだすことができるという点である。古典教育における教育実践については、大村はま、渡邊春美、後藤弘子、金子直樹などさまざまな実践者から提案がなされている。これらの授業実践から見えてくることは、いかにして古典を身近な存在として成立させるかということである。

なぜ古典を身近な存在にする必要があるのか。その一つの要因は、学習者と古典との距離が離れていることが挙げられる。原（1985）においては、高校現場の生徒の古典離れの実体を述べた後に、次のようにその理由を述べている。

なぜなら古典に触れ、古典を読むということは、現在では、自分の方から古典に入っていくという点では、ほとんど不可能になつてきているような気がするからである。むしろ、古典の方から、現在の私どもに近づいてくる工夫。いいかえると現在の日常の中に、古典を見出し出していく必要があるのではないかと考えられるからである。

ここから、学習者にとつて古典を身近な存在にする観点として、「日常性の中に、古典を見出し出す」ことが挙げられる。

渡邊（2018）は、古典離れの実態に対して、「高等学校における古典の授業に対して興味・関心を持たない学習者が増加し、古典離れ、古典嫌いにいたつていくという実態の報告は、戦後の早い時期からなされていた」とし、その原因について次のように指摘している。

今日においてもなお、古典を優れた典型、範型であるとする「典型概念」としての古典観に基づく古典教育が行われている。しかし、この「典型概念」に基づく古典教育は、先験的に古典の普遍的価値を認めるために、教え込みに陥る傾向がある。それが、生き生きと想像し、それを意味づけ、価値づけるべき、主体的な古典の読みを損なつていてと考えられた。

古典の価値観がア priori に存在し、それを読み取っていくという古典観が、古典離れの原因であるとしている。そこで、「典型概念」ではなく、益田勝実の「関係概念」という古典観への変換を提案している。

益田勝実は、「古典はことばの契機を通し、文字として機能させることで、現代を生き抜き、未来を開拓するエネルギーを得る時出現する」とし、古典を「関係概念あるいは機能概念」とした。「関係概念」としての古典観は、読み手が古典を読み、意味づけ、価値を見出し出すことをとおして古典との間に関係性が築かれた時、古典は初めて古典となるとする古典観である。古典は、学習者の

積極的、主体的な読みによって個々の中に立ち上がり、意味づけられ、学習者の生活と精神を相対化し、認識、感動、示唆、指針反省を新たにさせる。古典の価値は、先験的にあるのではなく、学習者の主体的な読みによって創造的に見いだされる。このような古典観を「関係概念」としての古典観として定義することにする。

「学習者の主体的な読みによって創造的に」古典を読み取っていく点に、古典離れを改善し、古典を身近な存在にする観点があると指摘している。

以上から、学習者が古典を身近な存在として、主体的に、創造的に読める授業が、提案すべき授業の観点であることがうかがえる。そして、学習者が自ら古典の価値を見つけ、古典との関係性を築いていくことができたならば、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三観点を達成していく授業になり得ると考える。

2 授業の基準

授業を行う上で、授業が「主体的な学び」学習者個人が古典とのつながりを主体的に見いだしていくこと」「対話的な学び」学習者が古典をもとにした対話を通じて、時代や周りのつながりの垣根を超えてつながっていくこと」「深い学び」学習者が古典を深く探求していくこと」を達成しているかどうかの判断するための基準を設ける。渡邊（2018）は、「古典教育の基本」として、以下の7つの観

点を示している。

- ① 学習者の興味・関心、問題意識の重視
ア 学習者の興味・関心、問題意識の喚起、維持、発展
- ② 教材の開発・選定・編成
イ 認識深化と学力育成のための教材化
- ③ 主体的学習の保障 段階的指導過程
ウ 目標の二重化による、基本（一斉学習）↓応用（グループ学習）↓まとめ↓発展（個別学習）の段階的指導過程
- ④ 学力育成
エ 国語学力の育成、課題解決力、情報操作力の育成
オ 学びの方法を身につけた主体的な学習者の育成
- ⑤ 協働的学習
カ 学習者の主体的協働学習、課題解決学習
- ⑥ 創造的読みと批評
キ 古典教材と学習者との関係性の創造
ク 学習者の主体的活動による古典の価値の創造的発見
ケ 教材と学習者の対話、学習者間の交流
コ 古典の読み（読解↑↓解釈↑↓批評）と内化
- ⑦ 古典の批評をおした内化
サ 〈古典〉の批評
シ 自己評価

これらは、指導者側の観点として表されている。学習者側の観点到抽出し、三観点に合わせて次に示す。

I「主体的な学び…学習者個人が古典とのつながりを主体的に見いだしていくこと」は、アトクとケから、「古典の教材に興味関心を抱き、主体的に古典の価値を創造し、教材と対話できること」。

II「対話的な学び…学習者が古典をもとにした対話を通じて、時代や周りのつながりの垣根を超えてつながっていくこと」は、カとケから、「学習者間での交流が生まれ、古典との対話を充実させたものとする」と。

III「深い学び…学習者が古典を深く探求していくこと」は、コとサとシから、「古典の世界と学習者の世界が広げ、批判的に古典を捉えること」。

以上の三つの観点が学習者の学びとして生まれている授業が、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を達成しているとする。

3 授業実践に関して

(1) 単元の基本情報

- 学年…岐阜県立大垣北高等学校1年生
- 時期…平成29年10月～11月(全6時間)
- 単元名…「みやび」に潜む古典世界に迫る。
- 学習材…「筒井筒」東京書籍 国語総合 古典編

(2) 学習材について

今回扱う『伊勢物語』『筒井筒』は、恋愛事情、結婚事情、伊勢物

語で語られる「みやび」など、時代の価値観が古典の中に潜んでいる。具体的に示すと主人公の男と幼なじみの筒井筒の女は結婚を誓い合い、成人した後二人は結ばれることになる。しかし、筒井筒の女の親が亡くなり、家が没落し始めると、男は貧しさやふがいなさに疑問を抱き、高安の女の所へ会い始める。高安の女は、はじめは奥ゆかしげに振る舞っていたものの後にはだらしのないひなびな部分を出し始め、それを見た男は高安の女から心が離れていく。

一方、高安の女の所へ通っていくことを知りながらも筒井筒の女は、化粧をし、山を越えていく男を思う歌を詠む。この筒井筒の女のみやびな部分を感じた男は再び筒井筒の女のもとへ戻っていく話である。この中では、女の家や裕福さが結婚相手の男の富や社会的地位をさめることが示されている。また、伊勢物語の重要な観点であるみやびのこころを持った女性が最後に幸せを手にするということも語られている。

この学習材の観点は高校生にとっても扱いやすい領域だと考える。男と女の関係については、学習者の身近にも存在し、生活の中でも話題に上がりやすい。従って、学習者は意識高く、自ら進んで読みを展開すると考える。すると、学習者の身近に存在している「恋愛」という観点と古典の世界に描き出された「恋」という観点が、学習者の読みの中で、錯綜しはじめるようになると考える。そこに、現代の価値観では説明のしがたい古典で語られている価値観が存在しているということにも気づき、古典世界への主体的な学びが生まれ初め、伊勢物語で描かれている「みやび」を読み取っていくことへとつながると考える。

学習者が、現代の『恋愛』と王朝時代の『恋』という、文化的背景の異なる観点をもつて読むことは、『みやび』の解釈をより深めていくと考える。それは、伊勢物語の古典常識としての「みやび」として「洗練された美的意識であり、貴族的な教養と美意識」という言葉としてだけ理解するのではなく、学習者の身近な価値観と結びついた言葉とつなげることで、実感を伴ったことばの学びになると考えるからである。そして、学習者が考えていく中で、自分の価値観も見つけ出し、学習者の世界観に変化を与え、ことばを豊かにすると考える。これらの学習活動が、学習者を古典の世界から遠ざけることなく、学習者が自らの問いと古典に語られている問題領域とを関わせて読み、様々な価値を見つけ出していく読みの礎を築くと考える。

(3) 授業方法

一つ目として、学習者の身近な存在としての古典を意識づけるために、恋愛漫画を例として出した。先ほど述べたように、筒井筒の中に表示されている男女の関係性と恋愛漫画の男女の関係性は、似ているところもあれば、異なっているところもある。その異同が学習者の読みを深めていく装置として働くと考ええる。例として出した漫画は、「キミのとなりで青春中」。この漫画は、幼なじみと最終的に結ばれる恋愛が描かれている。「筒井筒」にストーリー性が類似しているため用いた。もう一つの漫画として、「マイルノビッチ」。これは、恋愛漫画の描かれ方の視点が他の作品と違い、作者の意図が掴みやすいと考え、取り上げた。作者の意図に関しては、この次に述

べる。

二つ目は、古典も漫画も作者の意図があって作られているという観点から読み深めていくという観点である。「マイルノビッチ」の裏表紙には作者のコメントが書き記してあり、その作品を描く目標が「恋愛指南手引き漫画です」とある。これを学習者に提示することで、漫画も古典もある意図があって語られているという部分は共通しているということを示した。この観点を示した理由は、古典作品も現代の作品も意図があって作られているという点では変わっていないことを学習者に実感させ、現代の文学作品を読むことに近づけて、古典に向き合わせられると考えたからである。

(4) 単元計画

【第一次】

- ・ 歌物語の概要、伊勢物語の概要について理解する。
- ・ 本文の範読を聞いた後に、音読を行い、的確に音読できるようにする。

- ・ 予習で行ってきた訳の確認を行う。確認を行う際は、助動詞に注意して訳せているのかをペアで確認する。

【第二次】

- ・ 昔男と筒井筒の女の幼少期の場面について、本文を古典文法・古文単語に気をつけて訳し、物語の内容をつかむ。
- ・ 背の高さと髪の毛の長さの関係性から男と女が結婚適齢期になったことを理解する。
- ・ 幼少期からの結婚願望が実ることを理解する。

【第三次】

・昔男が浮気するところから、それを見守る筒井筒の女の和歌が詠まれる場面について、本文を古典文法・古文単語に気をつけて訳し、物語の内容をつかむ。

・男が高安の女の所へ通うようになった理由である通い婚と女系制度の社会構造について学ぶ。

【第四次】

・高安の女の和歌と男の気持ち筒井筒の女に戻っていく場面について本文を古典文法・古文単語に気をつけて訳し、物語の内容をつかむ。

【第五次】

・筒井筒の女と高安の女を比較し、筒井筒の女を選んだ理由を考える。

・選んだ理由が平安時代の「みやび」という価値観に基づくことであることを理解する。

【第六次】

・筒井筒という物語で伝えたかった作者の思いを考えることで、古典の世界についての認識を広げる。

・古典の世界と学習者の世界とをつなげ、異同を読み取る。

(5) 記録媒体

- ・写真
- ・ICレコーダー
- ・ビデオカメラ (授業全体を教室後方斜めから定点でおさめている。)

4 実践考察

第六次に焦点を当てて考察を行っていく。

(1) 学習者の価値観と古典世界の価値観を比較する読み

学習者O、学習者IW、学習者ITは、男を選ぶという自分に置き換えた観点から、自分の価値観を用いて話を展開している。

(学習者O、IT、IWは女性)

学習者O…作者が何を伝えたのかがよく分からん。女は変わるぞってことかな。

他の二人…それは違う気がする。

(中略)

学習者O…でもさ。高安の女のほうが、生きていくのには困らんやん。

学習者IT…なに…やっぱり、経済的な面よりも、もつと心の素晴らしい人のほうが一生一緒にいるって言うのは、良いって言う…。

他の二人…ねっ！

学習者IW…自分が男。逆(に選ぶ立場)だと思って考えれば良いんじゃない？

学習者O…私、もし選ぶんなら、選んだつたら、経済面を選ん
でまう…。

学習者 I T … あー…。そういう女なんやな。

全員…(笑う)

学習者 I T …うちもそうだけと…

学習者 I W …まー(そうだよね)。

学習者 O …お金がないと生きていけない？

学習者 I T …でも性格を選んだんだよね。

学習者 I W …(高安の女は)見られてないって思ってるかもしれないけれど、こつち(筒井筒の女)はいなくても化粧するやん。

学習者 I T …疑問なだけけど、高安の女の方ものぞき見されてるの？ 柵とかからのぞき見たんじゃないかって、たまにたま隙間から見えたってこと？

他の二人…そう。気づいていないと思う。

学習者 I T …のぞき見やん。

学習者 I W …しようがないやん。

波線部において、異性を選ぶ基準という学習者の価値観の話から会話を展開している。そして、傍線部に会話がうつる。傍線部においては、経済面と性格という対立関係を見いだしている。すると二重傍線部の内容に途端に飛躍し始める。ここで、見られる対象(高安の女)に思考過程が移ったのだろう。そこで、垣間見るという行為について言及している。垣間見るという行為に対して、現在の価値観から受け入れられない部分が見られる。最後は学習者 I W の「しようがないやん」という言葉で回収されてしまうが、そこに

は、時代の価値観の違いを受け入れていく学習者を見ることができ

る。
ここから、「授業の基準」にある I「古典の教材に興味関心を抱き、教材と対話」する姿や II「学習者間での交流が生まれ」ている姿が見られる。しばらくすると、以下の会話へと話が深まっていく。

学習者 I T …伝えたかったこと…

学習者 I W …表面だけで見ちゃダメだよ。ってこと。

他の二人…あー。

学習者 I W …化粧とかさ、本来はみとれんやん。こちらもさ、「けこの器に盛りける。」って、普通は見んやん。見れんところを見るって…。

学習者 O …中身を見る。表面にとらわれるんじゃないかって。

(中略)

学習者 I T …高安の女って、見かけだけやったんやな。「はじめこそ心にくくもつくりけれ」って書いてあつて。「心にくくって、どういう意味やったっけ？」

学習者 I W …奥ゆかしいっていう意味。

学習者 I T …はじめは(奥ゆかしさ)を繕っていたんだ。

(中略)

学習者 I T …昔は「みやび」な女性が良いって(先生が)言ってたよな。今も「みやび」な女性がいいよね。

学習者 O …歌(和歌)がうまい人とか。

学習者 I T …歌(和歌)がうまい人ね。教養がある人だよな。高

安の女は、裕福であつても教養がなかつたんやな。

ここでグループ活動の時間が終わる。ここでは、「みやび」について言及し始める。古典に描かれている筒井筒の女の、男がいなくても化粧をすることや高安の女の「けこの器に盛りける」という表現に着目し、その対比から「みやび」という言葉に迫っている。また、高安の女の「はじめは心にくくもつくりけれ」という表現に着目し、奥ゆかしさが取り繕われた表面的な女性像を読みとり、逆に「みやび」な筒井筒の女を教養がある女性と読み進めている。また、その教養の観点の一つとして歌の上手さがあることに気づく。そして、今も「みやび」な女性がいいよねという発言から分かるように、現代の価値観ともつながりながら読み進めている。

このグループの会話から、現代の学習者の個々の価値観を起点に、古典の価値観の把握へと読み深まっていく様子が見られる。そして、学習者は現代とのつながりや個々とのつながりを意識して読み深めていると分かる。「授業の基準」をもとに考えると、Ⅱ「古典との対話を充実させたもの」としては、「みやび」な女性を読み取る所や、「心にくく」という表現に迫っている所から見つけられる。

(2) 作者の意図に焦点を当てた読み

学習者Tは、グループで話し合っている時に、筒井筒の女と高安の女の設定に焦点を当てた意見を出していた。以下には、グループ別発表の際の談話を示す。

学習者T…どうして筒井筒の女を選んだのかということなんですけども。まず、この時代において恋愛することが文化なんだという時代にあるんですよ。それで、どうせ恋愛する文化の中で生きるんだつたら、泥沼の不倫よりも純愛でいきましようっていうね。で、たぶん、筒井筒の作者が津々浦々の男子が、この女と結婚したいっていうのを作者が必死に考えて、生み出した筒井筒！

他の学習者…あゝなるほど。(感嘆の声が上がる。)

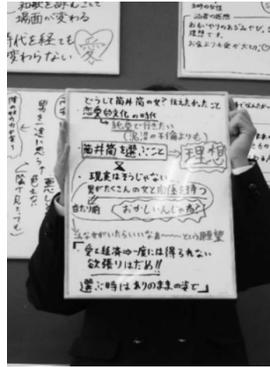
学習者T…筒井筒の女を選んで、一生恋愛するというのが、まさに理想的な出来事。現実はどうじゃないよと。

他の学習者…あゝなるほどね。(笑いに包まれる)

学習者T…男が沢山の女と関係をもちます。それがあたりまえの時代。作者はそこに、「ちよつとまで、おかしいんじゃないかね？」って。だから、理想的な女がいたら良いなっていう願望があったのと、プラスで、筒井筒の女を選んで、一生恋愛することが、一番良いんじゃないかって。結局、泥沼の恋愛よりも純愛が一番いいってやつですね。

(拍手)

学習者Tは、最終的に主人公が筒井筒の女に戻っていった理由を恋愛の観点からまとめている。「一生恋愛する」「理想的な出来事」「泥沼の不倫よりも純愛でいきましょう」などといった発言は、現代



を生きる学習者の価値観に元づいた意見である。しかし、波線部の「筒井筒の作者が津々浦々の男子が、この女と結婚したいっていうのを作者が必死に考えて、生み出した筒井筒!」の部分からは、作者の古典作品

を作り出した意図に迫って読んでいるといえる。点線部「一生恋愛するというのが、まさに理想的な出来事。現実はそのじゃないよ」の部分からは、古典世界の理想と現実を、古典を読む中で創造したといえる。傍線部「男が沢山の女と関係をもちます。それがあたりまえの時代。作者はそこに、『ちょっとまで、おかしいんじゃない?』って。」の部分からは、古典の世界の価値観を見出しつつも、「泥沼の恋愛よりも純愛が一番いいってやつですね」という表現からは、古典世界を創造的、批判的に読み、古典との関係性を築いていることが見える。また、二重傍線部「あくなるほど」の部分からは、他の学習者も発表に呼応している点に着目したい。学習者Tの発表をもとに学習者全体に学びが浸透していると言える。

「授業の基準」をもとに考えると、I「主体的に古典の価値を創造し」が点線部の古典世界の理想と現実を読む中に見える。II「学習者間での交流が生まれ、古典との対話を充実させたものとする。IIIは、二重傍線部の学習者の呼応から見られる。III「古典の世界と学習者の世界が広げ、批判的に古典を捉えること。」は、傍線部の学習者

が読んだ内容から、自分の考えを見だし、発表しているところから見いだせる。

5 おわりに

本稿において、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現する授業を行うために、漫画という副教材を用い、どちらも作者の意図によって作り上げられた作品であるという観点から「筒井筒」を読み取っていく学習を展開した。その結果、学習者の授業中の反応から、授業基準であるI「主体的な学び」・学習者個人が古典とのつながりを主体的に見いだしていくこと、II「対話的な学び」・学習者が古典をもとにした対話を通して、時代や周りのつながりの垣根を超えてつながっていくこと、III「学習者間での交流が生まれ、古典との対話を充実させたものとする。IV」・深い学び」・学習者が古典を深く探求していくこと、【古典の世界と学習者の世界が広げ、批判的に古典を捉えること】を見いだした。

従って、漫画を古典と比較して読み取る教具として用いる場合には、その作品の作者の意図に焦点をあて、古典の作品も同じ意図をもって作られた作品であるという視点から、古典の読みを行うことが有効であることを示唆するに至った。

この結果から、古典の世界へと学習者を誘うためには、一度、古典を現代に引きつけ、価値観の異同に学習者を出会わせ、葛藤させ、そこから生まれた違和感をもとに、古典の世界へと導く展開が、古

典の初期指導においては重要になってくるのではないかとということがわかった。実際、今回の授業においても、古典世界に描かれた「恋」と現代の学習者の価値観「恋愛」というものを比較し、どちらの作品にも共通する「作者の意図」に焦点をあてることで、学習者は、古典を読み深めていくきっかけを掴んだと考える。つまり、教材内容の異なる「同」に着目させた後に、「異」へと導いていくという授業方法である。この授業方法によって、学習者の古典に対する意識減退は、軽減されると考えられ、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の三観点を含んだ授業になると考える。

一方、古典の世界を引きつけて読むことは、誤読を引き起こす可能性も大いに含んでいる。従って、教材の内容の類似性から、教材の違いへと導く授業方法の観点を追求していく必要性がある。

参考・引用文献一覧

- 鈴木日出男『伊勢物語評解』筑摩書房 (2013.6.10) 初版第1刷
滝瀬爵克『伊勢物語文学の世界』新日本印刷 (1988.2.25)
田口尚幸『伊勢物語入門 ミヤビとイロゴノミの昔男一代記』太平印刷社 (2004.6.24)
原國人『伊勢物語の原風景 愛のゆくえたずねて』有精堂出版 (1985.11.20) 初版 pp. 168-169
室伏信助『伊勢物語の表現史』笠間書院 (2004.10.30) 初版第1刷
渡辺春美『国語科授業活性化の探求Ⅱ 古典(古文)教材を中心に』溪水社 (1998.8.1)
渡辺春美『古典教育の創造—授業の活性化を求めて—』溪水社

(2016.3.20)

渡辺春美『関係概念』に基づく古典教育の研究 古典教育活性化のための基礎論として』溪水社 (2018.2.20) p. i, p. iii, pp. 4-5, pp. 307-308

青木幸子『ドラマ手法を用いた古典教材のレッスン—伊勢物語・筒井筒—』『コミュニケーション文化7号』(2013.3.18) pp. 23-33

井浪真吾・竹村信治『古典教材研究のための論文読解：古典文学研究者の〈学び〉を学習者の〈学び〉に変換する』『学習システム研究 (9)』(2017.3.31) pp. 35-49

窪田祐樹『物語絵から読む『伊勢物語』：教材としての可能性』『教育デザイン研究 Journal of education design (7)』(2016.1) pp. 70-79

後藤康文『幼き日のかねごと—伊勢物語』第23段・「へんげん」の解釈』『九州大学国語国文学会 語文研究 (71)』(1991.6) pp. 32-39

難波健悟『古典における比べ読みを軸とした授業の考察』『国語教育研究 第五十七号』(2016.3.31) pp. 67-78

古本理恵『高等学校における古典教材の研究：『伊勢物語』「筒井筒」の場合』『論叢国語教育学 (12)』(2016) pp. 79-90

佐藤さぐり『ペイルノビッチ』集英社 (2011.10.16)

藤沢志月『キミのとなりで青春中。』小学館 (2008.12.14)

高等学校学習指導要領解説 総則 (2018.7)
高等学校学習指導要領解説 国語編 (2018.7)

(岐阜県立大垣北高等学校)